

1名、就業者4名、就業していないが日中活動が安定しているものが2名であった。診断的にはアスペルガー障害が3名、広汎性発達障害が3名、特定不能の広汎性発達障害が1名で、診断を受けた時期は事例A以外、すべて20歳以降であり、全例に対し主治医から診断名の告知と認知特性についての説明が行われている。通院状況は表にあるように定期的なものから不定期なものまで様々であり、何らかの投薬を受けているもの5名、投薬を受けていないもの2名であった。WAIS等の知能検査を実施したものは7名中5名であり、主たる結果は表の通りである。知能検査を実施していない2名も生育史や生活歴やコミュニケーション特性から高機能群と判断できた。

平成21年10月～12月の3ヶ月間に各被験者に対し、別々の担当者(7名の被験者に対して7名の心理士)が、すでに述べたような方法で2回個人面接を行い、担当者が逐語録を書き起こして被験者のライフストーリーを作成した。

以下に7名の生育史・生活史(下線部は危機の乗り越えに関連する要素)、ライフサイクル上の危機とそれを乗り越えられた要因を示す。

【事例1】19歳男性A、大学生。

(生育史・生活史)

幼児期、学童期を通じて、ルールを守れないなど社会性の未熟さが顕著で、集団行動が困難だった。小学校低学年で児童相談所に紹介されPDDの可能性を指摘されたが、両親や学校の見守りの中、大きな破綻なく義務教育を通過している。

一方、自覚的には小学校6年頃から、“周囲から浮いている”と感じ始め、“普通になりたい”という思いから、周囲の生徒のまねをするようになる。中学生時代は、その方法過ごすことができたが、高校生になると“まねばかりしている”ことが同級生らに気づかれてしまい、イジメの対象になった。当初、本人はイジメであることが分からなかったが、やがてイジメと気づき、1年の秋に体調を崩したことをきっかけに不登校となる。不登校になったあと、あまり間をおかずに両親の

勧めで精神科クリニックを受診するとともに、通信制の高校に編入の手続をとった。

通信制の2年目に発達障害者支援センターに行き、支援を受けるようになり、大学受験を経て現在に至っている。大学では支援センターからの助言もあって学生相談室に出向き、上級生の支援者(ピアサポーター)の支援を受けるようになっている。

〈危機と乗り越え〉

①高校での対人関係の危機

小中学校では教師の支援や本人の工夫(“周囲のまね”)に対処可能だった。しかし対人関係が広がる高校では対処不能となり、身体化に引き続いて不登校となっている。

〈乗り越えにつながった要因〉

直接的には精神科受診と通信制への転校が転機となったが、比較的迅速に対処された背景として①幼児期より両親が本人の話を聞いており、理不尽な叱られ方をしていないので、基本的な愛着関係が成立していた②両親が現実的で安定した対応(責めずに受診を勧めるなど)を行った③本人に学業意欲があった、があげられる。

本人はまだ大学生であり、就労の問題などこれからも危機の発生が予測されるが、発達障害者支援センターや医療機関という場を通して、自己理解を深めつつあり、「相談する」というスキルも向上しているので、克服していくように思われる。

逐語録から一親の見守り①

面接者：Aさんの場合、イジメに遭ったり、小学校では周りに迷惑かけたこともあったわけですが、そういう時、ご両親はどういう感じでしたか？

A：見守ってくれている。・・・見守るというよりはもうちょっと前に出てくれた。自分に非がある時には言うてくれたし、相手に非がある時は、ちゃんと(決着を)つけさせるように言うてくれて、それで出来るようになった。

面：じゃあ、自分に非があったときは、「ダメでしょ」って怒られた？

A：理由なく怒ることはしなかったですね。

逐語録から一親の見守り②

面：学校に行く気になれなかったとき、ご両親は『行きなさい』みたいな感じではなかったですか？

A：何も言われませんでした。むしろ無理していたのを察してくれていた。(登校が) 難しいって納得してもらった。

面：しんどいって言えたんですね。

A：言ったというより行動で示した。行きたい気持ちには山々でしたけど。

面：行動が理解された？

A：分かってくれたというか、・・・今、無理させてはいかんというのが伝わった。

【事例2】22歳男性B アルバイト店員 (生育史・生活史)

発達は全般に遅れ、特に言葉の発達の遅れが目立った。保育園でも集団行動ができず、こだわり行動もあったため、専門家の療育に母親と通った。本人は「オモチャを使った勉強は楽しかった」と記憶している。小学校時代は引っ込み思案で友だちは少なかった。特定の年下の子と小学校卒業まで遊んでいたが、5年頃にはイジメにもあった。中学校では自発的に剣道部に入部し、上達はしないが粘り強く取り組んでいた。

高校では文系は点が取れるが、理数は成績が悪かった。2年時に、修学旅行で使える金がほしいと思い、焼き肉屋でアルバイトをした。人の話を聞くのが苦手で、仕事が覚えられなかった。忙しいときには混乱し、(メモをとる、復習するなどの自己対処もしたが) 最終的には、客とトラブルを起こして(客を睨みつけた)、クビになった。店長には「接客業は向いてない」と言われた。

高校の校内は落ち着いており、対人関係問題は他の生徒がフォローしてくれたので、小中学校より遙かに楽しかった。高校2年からは英検に取り組み、3年の2学期に準二級がとれ達成感があった。3年の3学期に再び金が欲しくなり、遊園地で毎日アルバイトをした。遊具の操作と、ゲームセンターでの接客だったが、規則が緩くアバウト

に仕事ができ、客の数も少なかったので問題は生じなかった。

パソコンに興味があったため専門学校に進学した。親しみやすい友達が多く、過ごしやすかったが、現在は「(専門学校時代は) 人に頼りすぎていた」と反省している。当時はアルバイトをしていたが、クレーム対応などで周りの足を引っ張っていた。

専門学校卒業後、製造業に就職した。当初は上手くやっていたが、“複雑な機械の使い方が苦手”、“チームの仕事が苦手と怒られてばかり”となり、半年で行きたくなくなった。やがて仮病を使って休むようになり、リストカットもはじまった。友達が「リストカットするぐらいなら辞めた方がいい」との助言を受け、退職。このエピソードから精神科受診につながり、やがてアルバイトの職を得ることが出来た。受診によって、「自己理解」が格段に進み、職場での適応も果然している。

〈危機とその乗り越え〉

①職場での不適応

機械の使い方が覚えられなかったことと、対人関係の問題が重なって生じている。高校時代や当時のアルバイトでは対人関係の問題が発生しても、フォローしてくれる友人がいたが、職場ではそのような人がいなかった。当初は、「自分の問題ではなく、機械が悪い」と他責的に考えたりしていたが、次第に追いつめられ、とうとう仮病やリストカットにまで発展した。

結果的にBは、友人に電話で相談し、退職を選んだ。その点では危機の乗り越えと言いがたいが、辞めなければ更に深刻な事態になったと考えられ、適切な対応であったともいえる。リストカットをきっかけに精神科につながることができた。

〈乗り越えにつながった要因〉

本人要因としては①比較的粘り強い性格②ある程度客観的に自己批判できること③就労への意欲があげられ、支援環境要因としては①相談に乗る友人がいたこと②精神科での相談があげられる。

逐語録から－職場での危機－

B：世の中を甘く見すぎていたというか、就職したときはきついつて思いました。最初の1、2カ月は頑張ってみるかかって感じだったんですけど、どうしても、機械の扱いがわからなくて、急いでやらないといけない仕事の時とか、慌ててパニックになっていました。

面：どうしたらいいと思いましたか？

B：ただひたすら頑張るしかない、質問して復習するしかないって思っていました。でも覚えられない。遅いだけならまだやりようがあったんですけど、始めの段階でわからない。それであれこれ言われて、もう無理だって思って、もうその頃から辞めようって考えてた。でも『他のところは雇ってくれんよ』って、脅しじゃないですけど、そんな感じだったこともあって、辞めれそうになかった。

面：たしかに、『他は採用してくれんよ』というのは脅しにも聞こえますが、現実のようにも聞こえますね。乗り越えられてると思われませんか。

B：たぶんまだ、乗り越えてないと思います。乗り越えたというより、他の部分がマシになった程度。コミュニケーション不足もあったんで、人づきあいを考えていかないといけないと思っています。

【事例3】 26歳男性C 無職

逐語録から－病院を受診して－

面：病院を受診して、どうですか。

B：ある程度楽になったって思っています。

面：わかったことや変わったことはありますか。

B：やっぱり、自分でも改善しないとイケないと思う。話を聞くのが苦手で仕事が覚えられないのがわかった。以前から劣っていると思っていましたが、広汎性発達障害が原因だって分かりました。

面：その名は聞いたことありましたか。

B：病院に行って初めて知りました。少し、「えっ」て感じはしたんですけど、納得しました。

面：一年通って自分で変わった点はありますか。

B：自覚しだしてからは、何とかしようと考えているんですけど、ほんとに変わったかなって言うのは今のところないと思います。

【事例3】 26歳男性C 無職

〈生育歴・生活史〉

乳幼児期から発達に遅れがあったようだが、本人には告げられていない。地元の小・中学校を卒業した。中学時代からイジメがあり、高校時代には、対人関係の問題から不登校を経験した。高3の2学期に親の勧めもあってオーストラリアに一人旅に行き、いろいろ経験して良い思い出になっている。高卒後、アルバイトをしたが（最長6ヶ月）、続かずに転々とした。20歳くらいから家に引きこもりがちになった。この時期、対人関係の苦手さを実感していたが、家にあった専門書に相談できる社会資源一覧の表があり、精神保健福祉センターを知り、自ら相談に向かった。その後、県外の専門学校に進学するが続かず、早々に退学した。それ以降は、県精神保健福祉センターや、クリニックなどに自主的に通院し、デイケアに参加するとともに、作業所に通っている。

〈危機とその乗り越え〉

①日々の家族との衝突

本人の部屋（「聖域」）に父親が入り、物を動かしたため、次の日、本人が掃除をし直したところ、予定していた運転免許の更新に行けなかった。

心配なことがあると母親に相談をするが、母親は「大丈夫よ」など、具体的なアドバイスがないため、イライラしてしまう。

②アルバイトの中断

自分で稼ぎたい、友だちが欲しいなどの理由からアルバイトを始めるが対人関係で苦しくなり、辞めてしまうことを繰り返した。接客が得意ではないのに、「接客業しかしたことがないため」、接客のバイトばかり探しており、それが悪循環になっていたようである。

〈乗り越えにつながった要因〉

2つの危機とともに、同一性の保持、視点切り替えの困難、対人関係の困難など、PDD特性が直接的に関係している。これらを乗り越えた要因として、本人要因として、①人に親和的なパーソナリティ②これまでの成功体験によると思われる

自己肯定感”が、支援環境的要因として①生活支援センターや病院のデイケアを上手く利用できた②理想化できる年長の支援者の存在”が挙げられる。

逐語録から－イライラしたとき－

C：相談しても思ったような答えが返ってこなくて、どこかに行くしかない。家にいても余計にイライラするし。〇〇（生活支援センター）がある。〇〇やこの病院に入院させてくれて電話を何回もした。

面：ほかにも選択肢があったんですね。

C：マンガ喫茶。駅前のクラブMとか。あと駅前の高島屋とか一番街とか、夜になったらライブをやっていますよね。そこに行ってみる。

面：やっていますね。路上ライブ。

C：その路上ライブに行ったり。

逐語録から－アルバイトの挫折－

C：失敗ばかりでした。どんなに遅い人でも3ヶ月でできる発注を、半年もさせてもらえない。

面：どんな失敗があったんですか？

C：レジでお弁当を温める時にソースをつけたまま温めてソースが爆発したり、中華まんを蒸す時に、奥に入れなくて手前に入れちゃう。別のアルバイトが手前から取って温まっていかなかったり。おでんの牛すじの入れ方がまずくて、底に穴が空いてレジがべちゃべちゃ。あとは、バックヤードっていうんですかね。レジが混んだから、後ろの人を呼ぼうと思ったら、強盗が入った時に押すボタンを押してしまって、私服の警官がいっぱい来て、給料からも何万円か引かれました。そういうことばっかりやってしまって、信頼がなくなって。

面：それでも半年くらいやったんですね。

C：ですね。

面：何でがんばれたんですか？

C：うーん、大変だったけど、楽しかった。宅急便の取扱や、お正月は年賀はがき、クリスマスならケーキとか、いろいろあって。僕は機械が苦手で、

レジでそれをやるからすごい難しかった。

面：難しいですよね。楽しかったっていうのはどの辺が楽しかったんですか？

C：いろんなお客さんと触れ合えることが良かったです。

【事例4】30歳男性D 会社員

〈生育史・生活歴〉

幼い頃より、父親の仕事の都合で引っ越しが多かった。特別仲の良い友達はおらず、人と遊ぶことよりも好きなテレビが最優先だった。小学校3年生の頃は、遠泳が泳げるのでクラスメートに認められていたが、高学年になると馴染めなくなり、やがて無視されるようになる。

中学校でもクラスメートから無視されていたが、2～3人友達がいた。特に勉強をしなくても成績は良かった。受験でつまづきそうになったが、担任の先生に助けてもらった。

高校は高専に入学。しかし、クラスメートと折り合わず無視される。勉強も急についていけなくなり3回留年する。しかしクラスメートが年下になって雰囲気が変わり、クラスから受け入れてもらえるようになった。同じ趣味の先輩や友達との出会いもあり、留年後は充実した生活になった。

高専卒業後、すぐ就職し一人暮らしとなった。しかし、ノルマのためプレッシャーを感じ、自分のペースを乱されて仕事についていけず、ミスやトラブルが職場で問題となる。余計な一言で相手を怒らせたり、相手の話が理解できないなど対人面でのトラブルもあった。それに伴って生活力も低下し、単身生活も危うくなっていった。

このころ不眠を訴え、職場のカウンセラーに相談したところ、精神科受診を勧められ、病院を受診。職場では配置換えが行われて適応が格段に改善した。現在は環境保全の仕事をしなが、パソコン・トラブルに対応している。生活面では、2ヶ月に一度母親がアパートに来て掃除や洗濯を手伝っている。

〈危機とその乗り越え〉

①高専時代の居場所のなさ、劣等感

中学校時代は級友から無視されても、成績が良かったため自信があり、居場所もあった。しかし高専入学後は成績が低下し、勉強面でも対人交流面でも自信を無くし、不安と劣等感が強くなった。

②就労後の職場での不適応

ノルマのある仕事にはプレッシャーを感じ、仕事の内容が覚えられないことに劣等感を感じていた。能力のある上司だったために、「出来ません・分かりません」と言い出せなかった。

高専時代の危機を乗り越えた要因としては、カードゲームの仲間（違うクラスの生徒や先輩など）がいたことが大きい。仲間と昼休みにゲームをすることを唯一の楽しみとしていた。また、留年後は、周りが年下になったので、自分が浮いた存在でも、当たり前になったことからクラスに馴染めるようになった。

就労後の危機の乗り越えは、職場のカウンセラーに相談したこと、そこから精神科受診につながったことがあげられる。医療と出会ってPDDの診断を受け、自己理解が深まり、苦手なことや対人関係など、トラブルが回避できるようになった。職場上司も専門書を読み、配置を換えてノルマのない部署に配属になった。また得意なパソコン関係の仕事が割り当てられ、意欲的になった。当初は「知らない」「できない」と言えずミスにつながるが多かったが、上司から「分からないのは恥ではなく、分からないままにしていることが恥」と助言され、「わからない」と云えるようになった。その他、相談相手を決めたこと、メモを取る練習をしたこと、周りの人に補助を頼んだこと、などが役に立った。

〈乗り越えにつながった要因〉

危機を乗り越えた要因としては本人要因として①ユーモアを理解すること②追いつめられてもひらきなおれる性格③指摘されれば工夫ができる、支援環境要因として①母親の家事支援②職場のカウンセラー③上司の理解④精神科での相談があげられる。

逐語録からー職場での変化についてー

D：やっぱり今の仕事が肌にあってて、こういうパソコン仕事だったら、金貰わなくてもやる。でもパソコンショップの店員は合わない。接客とかのスキルが無いから。

面：お客さん相手は大変ですか？

D：専門になるとノルマが課される。たぶんダメです。プレッシャーに弱いんですよ。

面：ノルマはしんどい？

D：ノルマがないとダラけるけど、ノルマでギチギチだと「どうしよう、どうしよう」になる。あと、わからん事があつたら聞けるようになった。

面：いつ頃からできるようになったんですか？

D：この2年。今の仕事やり始めて、わからない事があつたら聞いてみよう、気持ち切り換えてみたんです。今日の面接も日付を忘れてたんですが、電話して聞くことができました。

面：前はできなかった？やり方がわからなかったんですか？そういう気にならなかったんですか？

D：その気にならなかった。なんでこんなことで聞かないといけないのか、恥ずかしい。それにわからないのがツライ。

面：それが？

D：配置換があつて、これは聞かないといけないって所に立たされて、はじめて人に聞くっていう…だからあのパソコンが得意でこういう仕事まかされたけど、あの今システム担当の人には絶対かかわらないんだから、聞いてやろうと。

面：なるほど

D：それで、その人の仕事を少しでもお手伝いできればいいやみたい。そういった心境の変化があつたのかなーと…思っております(笑)

【事例5】 35歳男性E 工場内の機械修理。

〈生育史・生活歴〉

幼児期には特にエピソードはない。学童期は心配性で、他人に言われたことをそのまま信じて不安になる（ノストラダムスの予言など）ことが多かった。対人関係面では、気に入った友だちとず

っと一緒にいるという極端な付き合い方だった。小2の時、友人から「帽子を盗った」と犯人扱いされたことをきっかけに「友だちでも信用できない」と感じはじめた。小5くらいから勉強が苦手になり、小6では担任やクラブのコーチの偉そうな言い方に反発した。

高校からは、孤立しているわけではないものの、学校以外での友だち付き合いはほとんどなくなった。それでも「嫌われたくない」という不安は常にあり、『嫌われているかも』と感じたら、自分から話しかけて確認したりした。

高卒後就職し、仕事を中心の生活になった。仕事上バカにされるのが嫌で、いつも周囲の目を気にしていた。就職1年目に現妻と出会い23歳で結婚した。子どもが生まれたが、やがて発達障害があることが分かり、その問題から目をそらすためにパチンコに逃避したり、イライラして怒ってしまう自分をダメだと感じ続けていた。自分がうつ病になるのではないかと不安があり、妻にも発達障害ではないかと指摘されて、精神科を受診した。

受診後は次第に自己理解が深まり、妻の実家の協力もあってパチンコへの逃避も軽減している。

〈危機とその乗り越え〉

①子どもの障害からギャンブル依存へ

29歳のとき、長男が自閉症の診断を受けた。父親として理解して行動したいと思いながら、子どもを大声で叱りつけたり、妻のために家事をするべきと考えながら実際にはしないなど、自分への苛立ちが強まった。また、子どもの将来を不安に感じた。

このような状況から、元々好きだったパチンコにのめり込んだ。金が尽きると妻に内緒で貯金にも手を出し、悪循環になった。やがて使い込みが妻にばれたが、結果的にそれが底尽き体験となり安堵につながった。妻に許された後、本人の提案で妻方実家へ同居するようになり、パチンコへの耽溺も軽快した。妻の言うとおりに、子育てにも少しずつ関わるようになった。

この危機で最も重要な役割を果たしたのは、

妻である。自分では解決できなかった事態が、妻にばれたことで転換するきっかけになった。本人にとり妻は「この人には適わない」と思える唯一頭の上がない存在である。妻以外が相手なら自分を正当化するが、妻には素直に謝罪できる。妻は論理的ではなく、感情的に本人を追いつめるタイプであり、本人は緊迫を収拾するために謝罪する。本人の特性上、もやもやが続くことが苦手で、早くもやもやを解消したいとの思いも加わっていると思われる。

また妻の負担を軽減するために、妻方実家と同居したことが乗り越えに役立っている。

②昇進できなかったこと

勤め始めは、「優秀に見られたい」との思いが強く、周囲の評価を気にしていた。また「やりながら考える」ような行動は苦手で、十分準備して失敗がないようにする傾向があった。上司の指示には素直に従うイエスマンだった。

ある年、同期が先に昇進した。その時は上司に理由を尋ね、来年の推薦の約束を取りつけ、もう1年我慢しようと切り替えたがショックだった。子どもの問題も重なり、家族に当たることが多くなった。結局翌年も昇進できなかったので退職を考えるようになり、妻に相談したが、説得され退職はあきらめた。仕事に対するスタンスを変更し、自分のペースでいこうと切り替えていった。

この危機では、妻が相談相手になったことに加え、仕事に対する本人のスタンスに変化があったことも有効であった。周囲の目を気にせず、マイペースで仕事することで自信が付き、以前より失敗を恐れなくなった。仕事のリーダーになったことで、はっきり自分の意見を言うようになった。

〈乗り越えにつながった要因〉

本人要因として①基本的に人の言うことには従おうとする素直な性格、②最初は逃避的であっても、最終的には切り替えて自ら変化しようとする、家族要因として①パワーの強い妻の存在、②妻の実家の支援、支援環境要因としては①精神科での相談や投薬治療があげられる。

逐語録から一夫婦の問題

面：そのときはご夫婦の間も厳しかったですか？

E：うん、嫁さんはこの人には頼れんわ、と思ったと思います。僕も子どもの障害はあるし、理想の父親だったら家事を協力したりで、そういうのが世間でいう“いいお父さん”だろう、それとは違ってパチンコして、子どものことをしないという自分があって許せない。それで余計にパチンコへ行くんです。

面：こうするべきだと分かるけれど・・・

E：正しい方に行けなくて、どんどんやけになった。一日5万とかやられて、がくっときて。もっと追い詰められたらいいとか、そういう考え方にもなった。自分は苦しい目にあえばいい、罰だとか考えている時がありました。

面：だいぶ、きつかったですね

E：そう思います。嫁さんにも言わなかったですね。だましている罪悪感もあるしね。

面：一方で理想を描きながらできない。できなかったんですか、したくなかったんでしょうか？

E：したくなかったんでしょうね。・・・今は、極力、面倒だなと思ってもするようにしてます。嫁さんの評価も、昨日も話したんですけど、「最近はお下の子の面倒をよくみくれる」と初めて言われました。それまで感謝の言葉はなかったんです。最近になって、子どもとの付き合い方が分かってきた。

【事例6】48歳男性F 医療系専門職

〈生育史・生活歴〉

乳幼児期から落ち着きがなく、親を煩わせた。しかし4歳頃に重篤な身体病で生命が危ぶまれたこともあり、両親は非常に過保護・過干渉で、甘やかされて成長した。小学校低学年では着座できず、教師を困らせたが、他児との関係は良好であった。空想が多く、家ではひとり遊びか、工作ばかりして時間をつぶしていた。高学年になると休憩時間に集団で行動するようになったが、他児の迷惑が分からず、はしゃいで浮いてしまうよう

になった。

中学校でも、はしゃいで冷静な同級生から白い目で見られ、ときに邪魔者扱いを受けた。友だちがほしくて人に近づくが、結局去っていかれたという孤独感を感じていた。高校時代にいじめを受け、かなり落ちこんで不登校になりかけた時期があった。

高校卒業後、接客関連の企業に就職したが、気が利かないために上司に叱られることが続き、1年たたないうちに胃潰瘍になった。退職後は転職が続き、なかなか定職に就けなかった。最終的に親のつてを頼って就職したが、人の気持ちを傷つける発言をして問題になり、親に厳しく注意された上で再び退職した。30歳頃に医療系の専門学校に入学。そこで現妻と出会い、卒業後、結婚した。妻とふたりの時代は仲が良かったが、子どもが誕生し、発達障害児と判明した頃から、妻と衝突することが増えた。

多動な子どもに対して体罰をふるってしまい、結局、妻に同居を拒まれ、家を追い出されて実家に帰った。るようになった。現在は、ウィークデーは実家ですごし、週末のみ同居をして、子どもと遊ぶことが許される状況となっている。

また、専門学校卒業後の最初の職場でも、業務にミスが重なったことに加え、場をわきまえない発言が多いことから退職に追い込まれ、現在が二カ所目の職場である。現在の職場では、上司が障害を理解してくれて、同僚に働きかけてくれるほか、業務上のミスに対しても比較的許容的で、働きやすいとのことである。

〈危機とその乗り越え〉

①子どもへの接し方が分からない

子どもに発達障害があると分かり、妻は療育に通い出した。妻は本人に専門書を読むよう要求したが、本人は読書が苦手な上、内容が上手く理解できなかった。その結果、多動で衝動的な子どもに対して、厳しく叱る以外の方法が思いつかず、途方に暮れてしまった。次第に妻の見ていないところで、子どもに暴力をふるうようになり、それを妻にとがめられて、別居を申し出られた。

子どもの問題行動への対応は現在でも上手くできない。しかし、土日の日中に限定した屋外でのかかわりになったので、子どもから見ると「遊んでくれるオジサン」ということで、子どもが不安がったり怒ったりしなくなってきた。ウィークデーに接することができないのは淋しいが、自分でもこれがいかな、と思うようになってきた。やがて子どもたちが大きくなったら、父親らしいことをしてやろうと思っている。

②職場でのつまらない冗談やしやぶり

自分では相手が喜んでくれると思いきいで、冗談を言ったりお世話をしたりする。そのことでたびたび叱責され、離職にまで追いつめられたのに、まだ同じことを続けてしまう。背景には沈黙や緊張が苦手で、発言強迫にかられるようである。

現在は、職場の上司や精神科医から、“さみしいと感じても人と距離をとって、孤独に耐える”という課題を与えられ、次第にできるようになってきている。

〈乗り越えにつながった要因〉

本人要因として①対人希求性が強い②冷静な場面では正直で憎めない人柄、家族要因として①妻が本人の長所を認めていること、支援環境要因として①現在の職場の上司の理解②精神科医の助言、があげられる。

逐語録から一病院での助言一

F：病院の先生に会ってすごくほっとした。自分の話を丁寧に聞いてくれた。仕事でくだらないことをして辞めたときから、親にはバカにされていて、満足に話も聞いてもらえない。味方がいない感じ。病院の先生は、親の肩を持つわけでもないし、妻の肩を持つわけでもない。だまって聞いてくれるので話しやすい。

面：中立で安心できるんですね。

F：そうですね。そうやって聞いてくれた上で、『今は無理に同居しない方がよいように思う』とはっきり言ってくれた。それで自分も吹っ切れた。今の職場に寮があるので、そちらに入寮するための手続をした。実は、実家の方も追い出されかけて

いて、車のなかで寝たりもしていた。

面：たいへんですね。体の面でも。

F：病院の先生も心配してくれて、車のなかで寝るのはやめた方がよいと。それで職場の上司に相談したら、若い人が入る寮を斡旋してくれる話になった。親切にしてもらえて感激している。

【事例7】53歳男性 教育系専門職

〈成育歴と生活史〉

父親が転勤族で幼少期から頻繁に転居していた。小・中学校では、頻繁に忘れ物をし、教師に叱られていたが、“忘れ物をして叱られたこと”そのものを忘れてしまうために、自分の問題性に気づいていなかった。そそっかしく注意力が散漫なため、ケガもよくしていたが、平気だった。

高校になってから、忘れ物への自覚が芽生え、はじめて問題性を意識した。地元の大学に進み、大学院卒業まで親元で生活した。24歳で就職し、はじめて関西でひとり暮らしをはじめた。

最初は職場適応に問題はなかったが、人間関係のストレスを感じ、出身大学院のドクターコースに戻った。31歳時に大手の会社に就職し、34歳で結婚した。

新婚旅行中から夫婦げんかが起き、「些細なことで怒る」と新妻に指摘されて衝突した。結婚後、新居に入ってから夫婦ともに化学物質過敏症になり、特に妻が重症化したため実家に帰り、数年別居となった。当時は過敏症が気になって対人関係問題が背景化していたが、過敏症が軽快してから夫婦の対立が再び問題になった。そのため、妻が実家に相談したことから、発達障害であることが浮かび上がり、受診行動につながった。

〈危機とその乗り越え〉

①夫婦げんか

同居直後から、夫婦喧嘩や暴力が頻繁に起きた。妻の指摘に対して腹を立て、包丁を持ち出したこともあった。いったん腹を立てると、食事が摂れなくなり、体が弱ってしまうまで、なかなか怒りがおさまらなかった。

②職場での役割や内容の変化

職場で調整や管理が増え、人とコミュニケーションをする必要が出てくると、ストレスが高まり抑うつ的となった。人から聞いたことを忘れて、思い込みや勘違いをすることもあり、行き詰ってしまう。

〈乗り越えにつながった要因〉

①配偶者のサポート

妻は、本人の特性をかなり理解しており、ときには喧嘩にもなるが、それも含めて大きな支えになっている。

具体的には“本人の状態を医師に説明するとともに、医師の指示を本人に解説する（病院での通訳役）”“他人の気持ちを本人に伝えて、社会生活が円滑に送れるようにする（社会場面での通訳）”

“本人の躓きが予測される場面で、事前にアドバイスをする（コーチ役①）”“計画や順序を具体的に提示して、本人の行動を支援する（コーチ役②）”“本人が怒りそうなことは言わないようにして衝突を回避する（配偶者としての配慮）”

②怒りの制御のための服薬

服薬で怒りが抑制できるわけではないが、パニックにならない。ふだんの気持が鎮静されることにより、怒ることも少なくなり、それまで認識できなかったことが認識できるようになった。

③自己理解の深まり

妻の指摘や、TVやインターネットの情報から、『ふつう怒らない場面で怒っている』、『人を相手に調整する仕事は向いていない』などの特徴に気づき、自己理解を深めることができ、徐々に対処できるようになっていった。現在では、メモを作って見る習慣をつけることで、仕事やスケジュールを忘れることが減少している。

逐語記録から一人を指導する難しさー

面：若い時と今と、どう違うんでしょうか？

G：やっぱり立場でしょう。若い時は上の方が言うようにすれば済みますが、今は指示を出さないといけない立場ですから。そうすると、いろいろなことを考えながらやってかないといけない。

面：指導したり、人を動かすのは・・・

G：周りが見えてないとできませんよね。自分は、まわりがやっぱり見えないんです。注意力を周りに広く向けるのは、どうやってもできないような気がしますね。一つのことですぐに行ってしまう。困りますね。

面：それを乗り越えるのは…

G：なかなか難しいですね。誰かが見てくれれば出来るんでしょうけど、それじゃ立場がおかしい。だから、上の立場にできるだけならないようにはしてきているのかなという気はします。

面：上の立場にならないように？

G：はい。できるだけならない手段を取ってきた。民間の会社の仕事って調整が多い。そういうのが本当に嫌で、今の職に移ったと思うんですよ。その当時は、はっきりは認識してなかったですけど、今から思うとそれはあったと思います。

逐語記録から一妻の協力ー

面：今、奥様に協力してもらっていることを4つ教えてもらいました。気分が悪くなるようなことを言わないようにしてもらっている。キチンと指摘してくれる。躓きそうなところを先に教えてくれる。手順や計画を示してくれる。ほかに何かありますか？

G：一番は、やっぱり精神的な支えが大きいでしょう。普通の人の考えとの違いとか、人がどう考えているかがわからないわけですから、具体的なこともそうですけど、感情的なところですかね。そういうのは、教えてもらわないとわからない。家にこもって一人で生きていくのなら、まあなくても大丈夫かもしれない。一人ならパニックや怒ることもないかもしれませんが、そういうわけにはいかないので・・・。社会にどうしてもかかわらないといけないとなると、その辺が欠けていることでその辺を補ってくれる存在というのは大きいような気がしますね。

面：なるほど。補ってくれる存在なんですね。

D. 考察

以上7名の被験者への面接結果から、高機能広汎性発達障害者のライフサイクルで生じやすい危機と、その乗り越えについて考察する。

なお、考察に際し留意すべきことは、とりあげた事例にバイアスがかかっており(①精神科医療につながっている②主治医が“面接が有益”と判断した③全例が男性など)、結果が一般化できないということである。既述したように、高機能広汎性発達障害の方々には、医療につながることなく適応している方もいるし、医療につながっていても不適応が顕著な方もいる。ここで考察できることは、共通点を持った一群が自ら語った“危機の乗り越え体験”の傾向にすぎない。

1. 危機の内容と時期

被験者が語った主観的危機の内容は様々であるが、①学校内での対人関係(程度は様々だが全例)、②職場での対人関係(A以外全例)、③職場での作業能力の問題(B, C, D, F)、④配偶者との関係の問題(E, F, G)、⑤障害のある子どもへの対応の問題(E, F)などがある。

学校や職場での危機についてみると(表2)、どの事例も小中学校では大きな破綻はきたしていないが、高校と職場において危機を迎えている。その一方、専門学校や大学では、危機があっても軽度である。また事例Dの発言にあるように、高校でも留年をして年齢差が生じ、本人と周囲がそれを受け入れてしまえば、不適応感は少なくなる。

すなわち、高校や職場のように、同調圧力が強く、作業課題が多い環境で、支援者がいない/少ない場合、破綻してしまいやすいことがわかる。

なお、事例E以外の全例がイジメ被害に遭っており、Eの場合も、対人関係を回避することで被害を防いでいたように思われる。しかし、調査面接の時点で、イジメ場面にかかわる深刻なフラッシュバックに悩んでいる事例はなかった。

また、保護者や同胞から虐待を受けていた事例は一例もなかった。ただし、今回の調査は、主治医への聞き取りとカルテ情報、被験者の語りだけで構成されているため、断定は避けたい。

2. 精神科医療とのつながり

被験者の基本属性の項で述べたように、精神科受診時期はAが16歳であるほかは、すべて20歳以降であった。端的に言えば、危機に陥った被験者が何らかの問題行動を呈し、それに気づいた身近な人が勧めた結果、受診に結びついているといえる。

どの事例も学齢期から大なり小なり問題があったことを考えると、受診時期が遅いとも言えるが、この7事例のように衝動性や攻撃性が顕著でない場合、校内での不適応が目立たないため、学校関係者が気づきにくいのであろう。

今日では、発達障害の早期発見・支援が重視されており、発見の難しい高機能群でも、「10歳以前に自己と周囲との関係性をめぐる葛藤から混乱が生じやすいことを考えると、8歳までには診断を受けることが重要(木谷、2009)」という意見が多い。

早期に診断や支援を受けずにかろうじて適応してきた群が、高校入学や就職など“急な環境変化や役割の変化”に出会うと、不適応反応を呈する(図2)。この反応に保護者や教員や上司・同僚が気づき、スクールカウンセラーや職場のカウンセラー、保健師などを通じて、精神科医療につながるという流れがあると考えられる。

本研究の被験者7名の場合、不適応反応が起きてから比較的速やかに精神科医療につながったために、不適応の深刻化や長期化が防止できている。後述する性格要因にも関係するが、被験者らは医療や精神科に対する拒否感が少なく、そのことも早期の受診、危機の乗り越えにつながっているように思われる。

3. 危機を乗り越える要因

表3に、それぞれの被験者が危機を乗り越えた要因を、“本人要因”“家族の要因”“学校・職場の要因”“支援環境要因”の4領域に分けて記述した。事例間に共通して見いだせる要因をまとめると、次のようになる。

本人要因としては、“社会や人への親和性”、“外界希求的な性格”などがある。刺激過敏性や対人

恐怖心性ももちろんあるのだが、それよりも人間や新しい経験への志向性が上回っている。そのおかげで不適応から引きこもっても、短期間で次の行動が始まっている。

発達障害圏の青年で長期間の引きこもりに陥る群について近藤（2009）は、「自閉症的な認知特性を有するが発達・行動上の特性が目立たず、性格的に外向性が低いことが特徴的」と述べている。比較的適応がよい本研究の被験者らの性格が対人親和的・外界希求的であったことは、近藤らの研究を裏づける結果となったといえる。

その他の本人要因としては“不完全ではあっても一定の自己理解”があげられる。この点については、後述する家族要因が重要と考えられる。つまり、“家族による一定の本人理解を背景にした見守り”があるからこそ、“本人の自己理解”が育つのであり、家族の理解がない、不安定な環境下では、それらは育ちようがない。

家族、特に保護者の要因は、時間が経過して被験者の意識に上りにくいためか、言及が少なかった。総じて保護者との関係は、対立的・葛藤的であることが少なく、保護者は一定の本人理解のもと、適度な距離から見守っている印象である。一方、配偶者の方は、本人の問題行動をかなり直接的に批判し、対決しているように見受けられる。この対決は本人をかなり追いつめて、最終的には「妻にはかなわない」という“あきらめの境地”へと導く。この対決は、「この人（本人）に譲歩していたら大変なことになってしまう」という、配偶者による本人の特性理解から自然に発生した態度であり、“逸脱に対する限界枠”として機能しているように思われる。

次に支援環境要因であるが、被験者らを受容する集団として、高校留年後の級友や専門学校の同級生、路上ライブなどアンダーグラウンドのつながり、パソコン関係の仕事や技術系の専門職などがあげられる。その一方、臨機応変な対応が求められる接客業や、多忙なアルバイト、複雑な業務などでは不適応が生じて、短期間で離職を余儀なくされている。

青年期・成人期までアスペルガー障害（AS）の問題が顕在化しなかった、すなわち当事者が受け入れられてきた集団について舩松ら（2005）は、「限局した興味を持った人たちが多い集団や、変化が少なくマニュアル化された職場、職業として探求心が求められる職場」をあげており、本研究の被験者にもあてはまる。

一般企業就労で高機能広汎性発達障害者が陥りやすい問題について大杉（2009）は、「1. 会議やミーティング、2. 報告・連絡・相談・指示、3. 会話・電話」など 11 項目にわたって詳述しており、職場不適応を支援する者の参考になる（大杉の記述を簡略化して表 4 にまとめた）。本研究の被験者にも就労での危機・挫折を経験しているものが多く、特に“④営業・交渉・調整の困難性”と“⑤業務処理”上の失敗が多く語られている。

こうした困難性や失敗については、業務の本質にかかわる問題（サービス業におけるサービス能力、管理職における管理力）であるため、職場に理解を求めるのは難しく、実際、退職や転職によって危機を回避するしかない、という印象である。

支援環境要因として、精神科病院や発達障害者支援センターをあげる被験者が多かった。特に困りごとの相談や自己理解の深化に役だっているようである（もちろん考察冒頭に述べたバイアスはある）。

以上の 4 領域毎の考察をまとめ、図 3 に高機能広汎性発達障害者の適応を向上させる要素と低下させる要素を対比して図示した。被験者らの場合、向上させる要素が低下させる要素よりも多かったために、現状の比較的適応的な日々を送ることができているものと類推される。先の図 2 の下部に描いたように、彼らは不適応反応を起こして精神科医療に出会ったわけだが、その出会いから“支援者”“さらなる自己理解”“経験”などを獲得しているように思われる。

図 4 に示すように、定型発達者の場合もライフサイクルの移行には困難が伴いやすく（移行期）、うつ病などの精神障害や問題行動が発生しやすい。その一方、その乗り越えが成長にもつながる

わけだが、発達障害者においても、その基本構造は同じと言ってもさしつかえないと思われる。

ただし発達障害者の場合は、困難が発生する確率が高く、その性質も深刻であり、発生後も定型発達者のように帳尻を合わせて切り抜けたり、うまく撤退するスキルを持たないために、闇雲にぶつかって現場を混乱させたり、予告もなく遁走して関係者の怒りを買ってしまいやすい。

だからこそ支援者は、被支援者の特性や、彼を取り巻く環境の性質、その相互作用で生じた彼の問題行動だけでなく、彼のライフサイクル上の課題（壁）をよく理解して、彼自身がそれを乗り越えるのを助ける伴走者にならなければならない。

結果的に本人が疎外されるような問題行動は防止しなければならないが、支援者が問題の予防にばかり気をとられていては、本人には問題解決の機会が与えられず、成長がとまってしまう。

支援ネットワークは、彼らを囲い込んでその行く先を示す（取り囲み型ネット）のではなく、彼らが進もうとしている方向にある課題を見定めて、その課題の解決に協力する（伴走助言型ネット）形が望ましいのではないかと考える。

E. 結論

精神科病院に通院中の比較的適応のよい高機能広汎性発達障害の男性7名に2回の個人面接を行って、彼らがライフサイクル上の危機をどのように乗り越えているかを聞き取り調査した。その結果、彼らが危機を乗り越え、適応を向上させる要因として、“本人の人や社会への親和性”“外界希求性の高い性格”、“不完全ながらも一定の自己理解”、“一定の本人理解を前提とした家族の見守り機能および問題発生時の対決機能”、“職場の上司や同僚の許容的な理解”、“発達障害者支援センターや精神科医療など相談者の存在”があることが分かった。

支援ネットワークの構築に際し、各支援組織が、こうした要素について共通認識を持つておくことが重要だと考えた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表（別紙参照）

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

I. 参考・引用文献

- 1) 舩松克代ほか（2005）：青年期のアスペルガー一症候群の診断から支援まで. 臨床精神医学 34:1143-1150.
- 2) やまだようこ（2007）：質的心理学の方法—語りを聞く—. 新曜社.
- 3) 木谷秀勝（2009）：高機能広汎性発達障害の高校生年代の支援. 児童青年精神医学とその近接領域. 50(2):113-121
- 4) 大杉健（2009）：自閉症スペクトラムの人々の就労問題—一般企業職場での雇用—. 精神療法 35(3):332-337.
- 5) 土岐淑子・中島洋子（2009）：高機能広汎性発達障害者の就労支援. 児童青年精神医学とその近接領域. 50(2):122-132
- 6) 近藤直司：在宅青年・成人の支援に関する研究—ライフステージから見た青年・成人 PDD ケースの効果的支援に関する研究—. 厚生労働科学研究. ライフステージに応じた広汎性発達障害者に対する支援の在り方に関する研究（研究代表者 神尾陽子）. 平成 20 年度総括・分担研究報告書. 2009.
- 7) 塚本千秋他：高機能広汎性発達障害の青年・成人は精神科病院をどのように利用し、どのように支援を受けているか. 厚生労働科学研究. 青年期・成人期の発達障害に対する支援の現状把握と効果的なネットワーク支援についてのガイドライン作成に関する研究（研究代表者 近藤直司）. 平成 20 年度総括・分担研究報告書. 2009.

表1:被験者の基本属性

事例	性別	年齢	診断(診断時期)	家族状況	社会的状況	病院へのニーズ	通院状況	投薬	IQ
A	男性	19歳	AS(16歳)	父母、祖父母と5人家族	大学在学中	生活や学校適応の相談	月に1回程度	なし	100前後 V>P
B	男性	22歳	PDD(20歳頃*)	父母、妹4人家族	職業訓練校在学中	生活相談	月に1回程度	なし	80~90 V>P
C	男性	26歳	PDD(20歳頃)	父母と3人家族	作業所とデイケアで安定	生活相談と就労準備	2週に1回	あり	80前後 V>P
D	男性	28歳	PDD(20歳頃)	単身生活	技術系の会社就業中	仕事のミス、抑うつ、不眠	2ヶ月に1回	あり	120前後 V=P
E	男性	33歳	PDDNOS(30歳頃)	祖母、妻、2子の5人家族	機械修理工場就業	メンタルヘルス相談	不定期	頓服使用	未実施
F	男性	48歳	AS(45歳頃)	妻と2子の4人家族	医療系に就業中	妻子との関係相談、不安	月に1回程度	頓服使用	未実施
G	男性	52歳	AS(48歳頃)	妻と2人家族	教育系に就業中	仕事上の相談	月に1回程度	あり	120前後 V=P

*)事例Bは小学低学年から遊戯療法に通っていたが、医療機関で診断を受けてはいない

表2:被験者のライフサイクルと主観的な危機の程度

事例	就学前	小学低学年	小学高学年	中学校	高等学校	大学・専門学校	職業生活	結婚生活	育児
A	不明	自覚なし	自覚なし	軽度	最大	中度			
B	不明	自覚なし	中度	中度	軽度	軽度	最大		
C	不明	自覚なし	軽度	中度	重度	最大	最大		
D	不明	自覚なし	中度	中度	重度		最大		
E	不明	中度	中度	中度	中度		中度	中度	最大
F	不明	軽度	中度	中度	軽度	軽度	重度	軽度	最大
G	不明	軽度	軽度	軽度	中度	中度	重度	最大	

表3:被験者が危機を乗り越えた要因

事例	本人要因	家族の要因	学校・職場の要因	支援環境要因他
A	①協調志向の性格②学業意欲がある	①理不尽に叱られてないので基本的な関係がよい②現実的な対応(転校など)を行った	①不登校への対応として通信制高校②大学でのピアサポート(効果不明)。現在、大学生	①専門的相談の入り口として精神科クリニック②発達障害者支援センターの就学・進路指導
B	①粘り強い性格②協調志向で自己批判ができること③就労への意欲	早期の療育に連れて行ってもらったこと以外、言及なし	高校から相談に乗る友人がいた。現在、職業訓練校在学中	精神科での相談で障害告知がなされ自己理解が進んだ。
C	①対人希求の性格②以前の成功体験による自己肯定感	ひとりでの海外旅行など本人の自由な行動・体験を支援している	学校・職場での支援については言及なし、無職	①生活支援センターや病院デイケアの利用②施設に理想化できる年長の支援者。
D	①良い意味でマイペース②追いつめられても開き直る③ユーモア	母親による単身生活の家事支援	①高校でのカードゲーム仲間②職場のカウンセラー③上司の理解。技術系の専門職	精神科医療での相談(抑うつ・不眠の治療)
E	①基本的に人に従う素直な性格、②最終的には切り替えて変化しようとする	①強力な妻の存在(頭が上がりたくない)②妻の実家の支援。	学校・職場は我慢で乗り越えたと感じており支援要因に言及なし。機械工場	精神科での相談で障害告知がなされて自己理解が進んだ
F	①対人希求性が強い②冷静な場面では正直で憎めない人柄	妻が「障害児の父親として」拒否しながら、夫として認めている。	現職の上司の理解。医療系専門職	精神科医の助言と投薬
G	①一定の自助努力(メモ取り習慣など)②マイペースで人に乱されにくい	妻は喧嘩相手だが、本人の特性を理解し支えている(通訳・コーチ的役割)。	職場での支援については言及がない。教育系専門職	精神科での服薬(鎮静により認識しづらかったことが認識できる)。

表4: 職場で何が問題になりやすいか(大杉,2009より改変)

<p>①会議やミーティング(1対多)</p> <p>会議やミーティングを重要だと感じない 会議の趣旨や発言者の意図を読み間違ふ 自分の関心事以外のことには集中しない 参加者間で合意されたことに気づかない</p>
<p>②報告・連絡・相談・指示(1対1)</p> <p>報連相をしない 自分が体験したことは、その場にはいない人も知っていると感じている 伝言時に、相手の言い方を変換せずにそのまま上司に伝えてしまう 報告内容が細かくなりすぎて、概要がみえない</p>
<p>③会話・電話(1対1)</p> <p>議論が堂々巡りになり、相手は何を議論していたかが分からなくなる 本人の言い分が、相手や他人のせいになっているように聞こえる 言葉を文字通りに解釈し、ニュアンスを読めない 「どう?」などの曖昧な問いかけに答えられない</p>
<p>④営業・交渉・調整(主に1対1)</p> <p>相手を怒らせるので営業や相談窓口をさせられない 交渉や駆け引きが苦手。(例: 予定価格を相手に言うってしまう) 相手のニーズや希望を読み違える。 調整役をやらせると強権的になるか、調整不能になる。</p>
<p>⑤業務処理(一人)</p> <p>手馴れた業務、ルーチン化された業務をやるのは早い。 未経験のことは、何から手をつけたら良いかが分からず、固まる。 協力してやる仕事より、自分だけで完結する仕事を好む。 段取りや準備が苦手、優先順位がつけられない。 指示されたことはちゃんとやる割には、指示がないと動かない。</p>
<p>⑥ふるまい(一員として)</p> <p>他人の失敗は非難するが、自分が誤解されると怒り、周囲に理解を求める。 周囲が配慮しているのに、感謝が見えない。 皆が忙しくしているのに、「手伝いましょう」がなく、勝手にしている。 自分の困り具合をわかるように説明しない。表情から内面を読み取りにくい。 自分がどうにもならないと突然、断定的に言うので周囲が驚く。</p>
<p>⑦職場のルール(一員)</p> <p>具体的なルールはきちんと守るが、暗黙のルールが理解できない。 ルールに書かれていないことは、してもよいことと勝手に判断する。 細かい決まりにこだわる割に、自分勝手に見える。</p>
<p>⑧共用(一員)</p> <p>共用そのものを嫌がる。 共用物をやがて自分用に変えてしまう。 他人が触ると邪魔されたと感じてしまう。 整理やファイリングの分類が独特。</p>
<p>⑨付き合いや宴席(一員)</p> <p>知らない人がいる場を避けるが、人嫌いとも言えない。 黙々と一人で食べたり、席順に無頓着。 食事のマナーがよくなかったり、奇異な振る舞いがある。 「義理」や「人情」を理解しない。</p>
<p>⑩その他の特徴(個人)</p> <p>不鮮明な記憶を想像で補う癖があり、嘘つきに見えることがある。 長く職場にいても人の名前を覚えられず、会っても会釈がない。 パニックになるといなくなる(トイレなどでクールダウンしている)。 音や室温、光、においなどに過敏で、業務に集中力を欠いてしまう。</p>
<p>⑪労働力としての良さ</p> <p>配慮のコツがわかれば、健常者以上の戦力になることも多い。 他人を操作しない。陰口を言わない。</p>

図1:高機能PDD者のライフサイクルと精神科の利用チャート

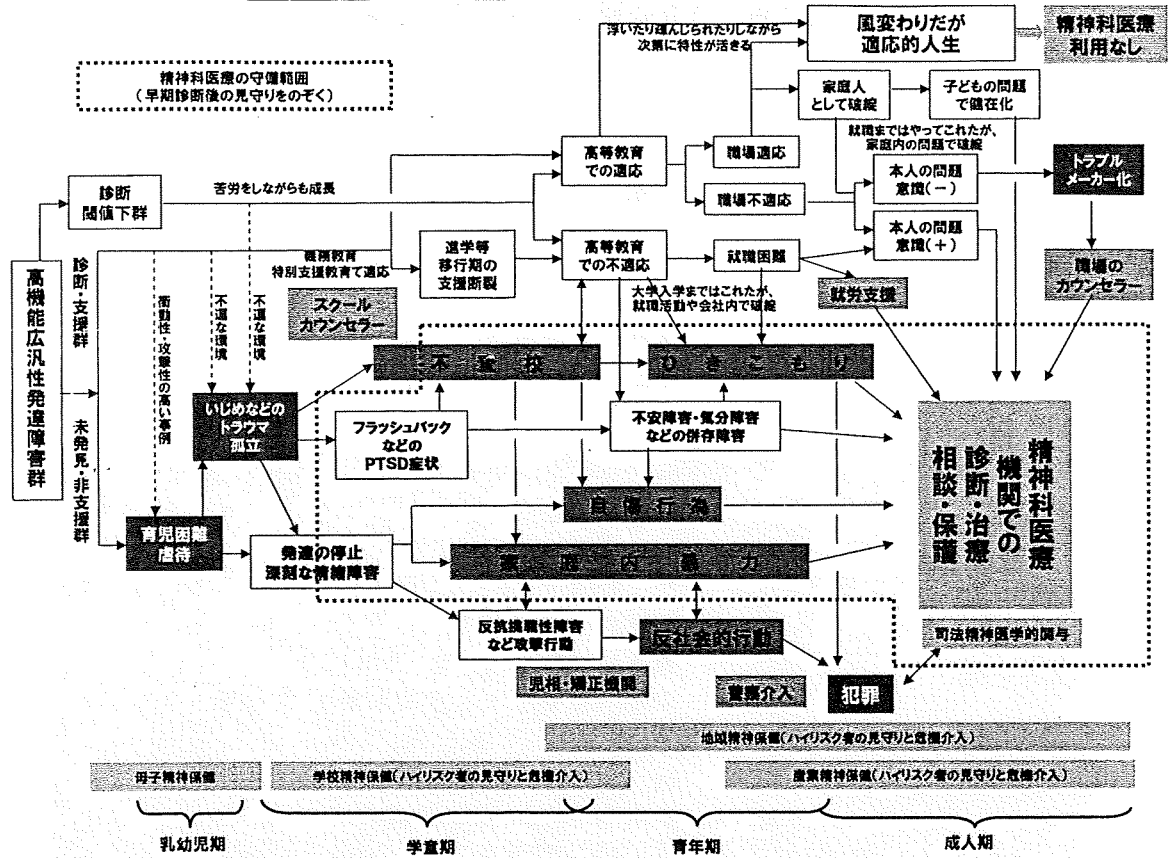


図2:不適応反応から適応へ

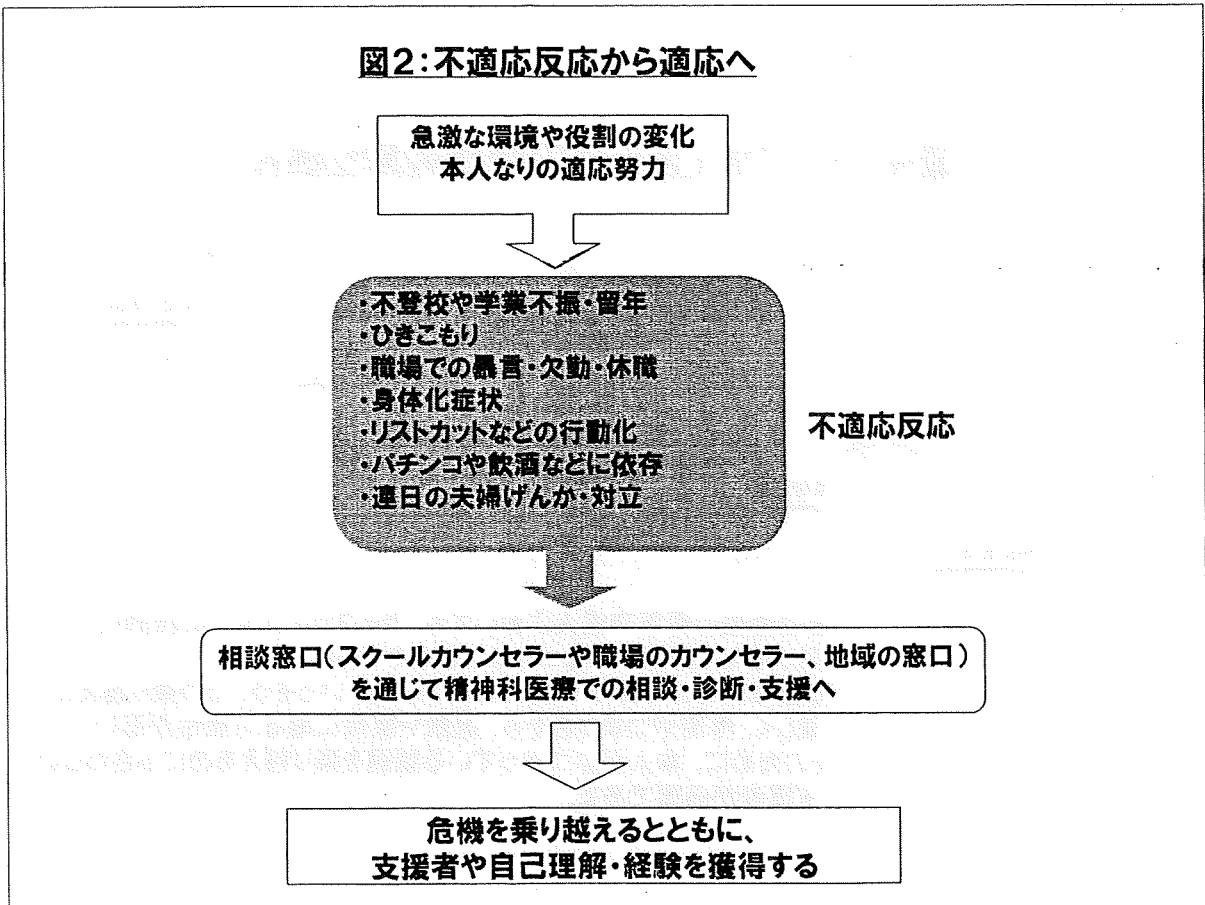


図3: 適応を向上させる要素と低下させる要素

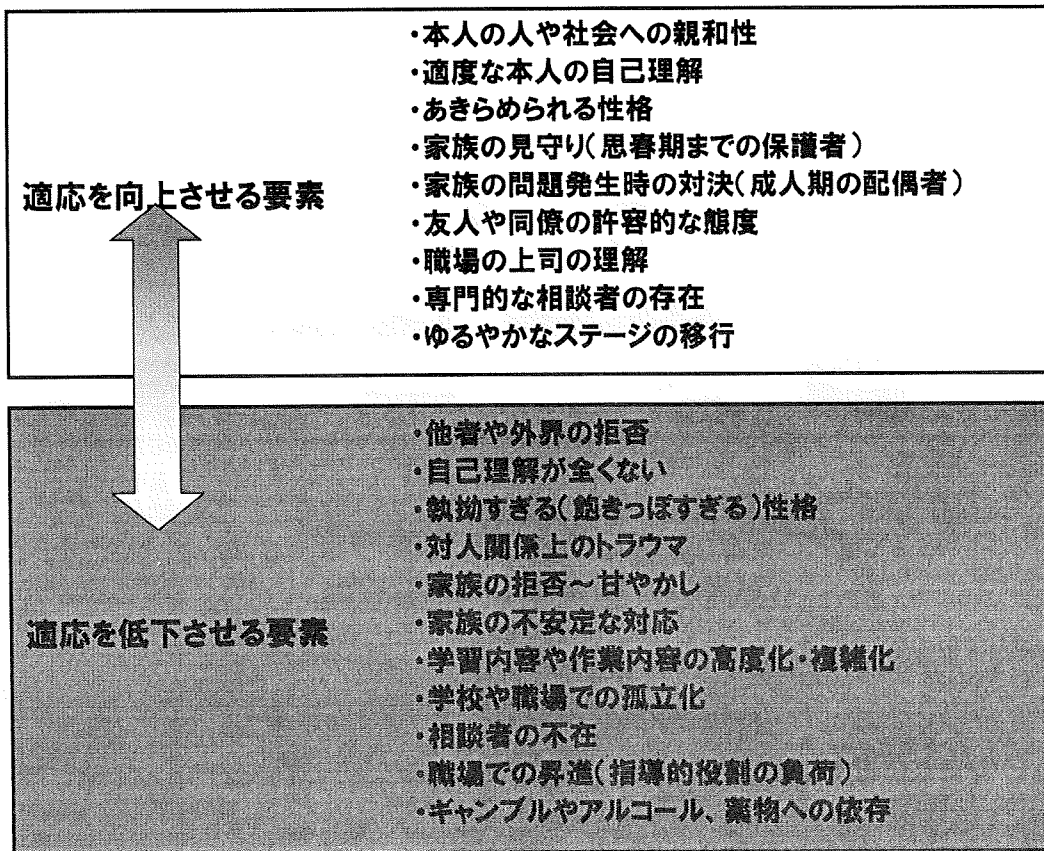
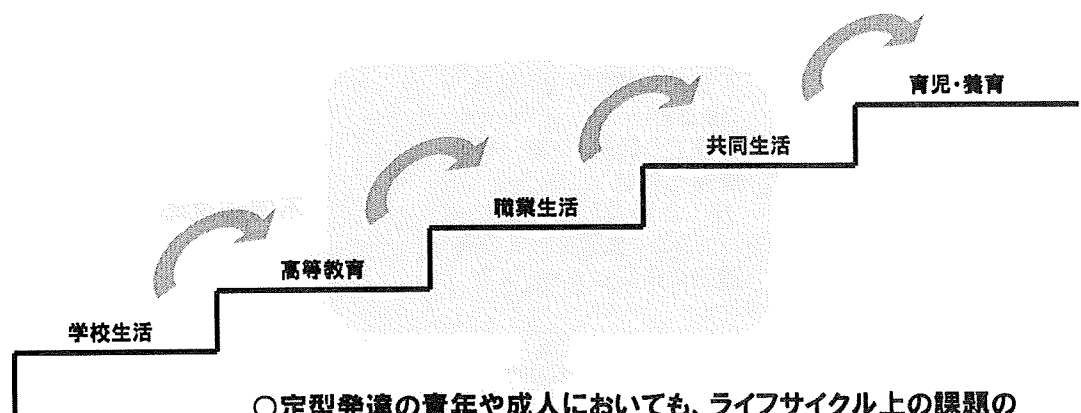


図4: ライフサイクル上の課題の乗り越え



- 定型発達青年や成人においても、ライフサイクル上の課題の乗り越えに停滞やつまづきはつきものである。
- 発達障害のある青年や成人の場合には、いっそう、その乗り越えが難しく、停滞やつまづきから、逸脱や疾病に陥る可能性が高い。
- そのため、本人がぶつかっている課題を乗り越えるのにふさわしい支援者が必要である。

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）
分担研究報告書

教育から就労につながる支援の現状把握と課題に関する研究

分担研究者 鳥海順子¹⁾

研究協力者 橋本創一²⁾ 土肥満³⁾ 河西慶仁⁴⁾ 竹井ひとみ⁵⁾

1) 山梨大学 2) 東京学芸大学 3) 山梨県南アルプス市立落合小学校

4) 山梨県教育委員会 5) 保護者

研究要旨

本研究は、昨年度の研究を経て課題とされた「教育機関へのキャリア教育・進路指導のサポート」「教育から就労につながる支援の現状と課題の把握」のうち、後者について明らかにすることを目的とした。研究方法として、山梨県の就労関係者から現状に関する情報収集、青年期で就労している発達障害の保護者に対する聴き取り調査、山梨県及び千葉県就労支援機関等への視察を行った。その結果、支援の早期開始や継続のために、教育機関や就労機関などがネットワークを形成することが重要であること、そのためには相互理解が重要であることが示唆された。このため、今年度研究の総括として、1月末に「青年期の発達障害者就労セミナー」を開催し、相互理解の機会を設けた。

A. 研究目的

昨年度は高等学校期における関係機関との連携状況の把握のために、高等学校の特別支援教育に関する文献調査、養育者への聴き取り調査、山梨県内の高等学校特別支援教育コーディネーターに対する質問紙調査、文部科学省指定研究開発学校の視察を行った。その結果、山梨県の高等学校と関係機関との連携状況は、主として出身中学校や医療機関、発達障害者支援センターなどであり、生徒理解を目的とするものであった。先行事例の高等学校では、自立活動や自己実現の時間を設け、様々な関係機関との連携が生まれていた。また、どのような関係機関と連携をとればよいか情報がなく、連携ができない状況も見られた。今後、教育機関のキャリア教育・進路指導へのサポートが望まれる。さらに、教育から就労につながる支援の充実が急務である。以上から、本研究では、教育から就労につながる支援の現状と課題を

把握することを目的とした。

B. 研究方法

本研究は以下の4つ方法から成る。

1. 就労支援関係者から現状に関する情報を収集する。
2. 就労支援機関等の視察を通して、情報を収集する。
3. 就労している発達障害者の養育者に対する聴き取り調査を行う。
4. 青年期の発達障害者就労セミナーを開催し、関係機関、関係者間の相互理解を図る。

（倫理面への配慮）

本研究における個人情報については「個人情報の保護に関する法律」を遵守し、対象者の匿名性を確保した。調査については、対象者に目的を明らかにし、不利益を生じさせないよう配慮する旨を伝え、インフォームド・コンセントを実施した。報告書の確認を依頼し、公開の許可を得た。

C. 研究結果

1. 就労支援関係者からの現状に関する情報収集

5月27日、8月12日、10月7日、12月9日、1月14日の教育班会議に、地域療育支援センターのコーディネーターおよび、障がい者就業・生活支援センターの施設長が出席を依頼し、意見交換を行った。班会議の中で、「支援のレベルで発達障害を捉える必要があること、教育機関で得た学歴や資格と就労の現実とのギャップがあり、就労支援開始期から教育機関での支援や本人情報が引き継がれることが必要であること、手帳取得を納得して本人が選択できるには支援のネットワークの存在が大きいこと、発達障害に特化した支援が必要であること、失敗しても何度でもやり直せるシステムの確立、ネットワークの間隙を埋めていくのは「人」であること、本人と信頼関係を築ける支援者が、本人を伸ばす支援者として雇用主が機能できるようフォローすることが重要であること」などの情報が得られた。

2. 就労支援関係機関の視察

8月12日に山梨県の障害者職業センターと就業・生活支援センター、8月27日に山梨県就業支援センター、1月15日に千葉県幕張の障害者職業総合センター研究部門を視察した。

3. 養育者への聴き取り調査

連携状況を表1にまとめた。教育・就労・自立を連続性あるものとして捉え、生涯を通じた教育や支援の在り方を検討してほしい。学齢期における特別支援教育、個別の移行支援計画は社会的システムとして実施してもらいたい。自立に向けて職業のイメージが持てる中学3年生からのキャリア教育が効果的だと思う。手帳を取得しないと、支援を受けることが困難なのが現実である。職場や社会との折り合いがうまくいかなかった場合の本人や家族に対する支援も必要である。失敗しても何度でも再出発できるような手厚い支援を実現できるセーフティネットの確立が望まれる。

4. 青年期の発達障害者支援セミナー

今年度の研究から、連携を取るために教育機関

と就労機関、関係者間の相互理解を図ることが必要と考えられ、1月30日に青年期の発達障害者就労セミナーを開催した。就業・生活支援センター、障害者職業センター、特別支援学校教員をパネラーとして話題提供を行い、教育関係者、就労支援関係者、保護者など約50名が参加した。

D. 考察

教育機関における高学歴や資格取得が必ずしも就労につながらない現実がある。教育機関の情報が就労機関に引き継がれていない。今後、発達障害に特化した就労や生活支援が必要である。

E. 結論

教育から就労に移行する上で、就労支援のスムーズな早期開始や継続のためにネットワークの存在が重要であり、教育機関と就労支援機関との相互理解の促進が必要である。現状と課題を表2に示した。

F. 研究発表

1. 論文発表

・鳥海順子：発達障害事例における関係機関との連携。教育実践学研究（山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要），Vol. 14, 1-8, 2010.

・鳥海順子：山梨県内の高等学校における特別支援教育の実態。山梨障害児教育学研究，第4号，42-49, 2010.

2. 学会発表

・磯貝順子：障害の気づきから相談機関へのプロセス。日本特殊教育学会第47回大会発表論文集，2009。（磯貝順子は鳥海順子の学会名である）

3. 文献

1) 近藤直司（研究代表者）：厚生労働科学研究補助金障害保健福祉総合研究事業「青年期・成人期の発達障害に対する支援の現状把握と効果的なネットワーク支援についてのガイドライン作成に関する研究」，平成20年度総括・分担研究報告書，2009.

2) 鳥海順子（教育班研究分担者）「発達障害者センターなどの福祉分野と教育分野との連携についての研究」，教育班平成20年度報告書，2009.

表 1. 養育者の聴き取り調査における各期の連携状況

幼児期	小学校期	中学校期	専門学校期	就労期 (現在)
・医療機関	・医療機関 ・大学の土曜教室	・医療機関	・医療機関 ・発達障害者支援センター	・ハローワーク ・障害者職業総合センター (幕張) ・障害者職業支援センター (地域)

表 2. 保育・教育の段階におけるネットワークの現状と課題

保育・教育の段階	関係者や関係機関	支援の内容他	課題
乳幼児期	健診・医療機関 保育所・幼稚園・療育機関 発達障害者支援センター 他	発達支援 巡回相談 保護者支援	家族支援 保育者支援
小学校期	小学校・ことばの教室 発達障害者支援センター 他	学習支援 巡回相談 保護者支援	学習・生活 家族支援 教員支援
中学校期	中学校 発達障害者支援センター 他	学習支援 巡回相談 保護者支援	学習・対人関係 自立のイメージ 自己理解 家族・教員支援
高等学校期	高等学校等の教育機関 ハローワーク 発達障害者支援センター 他	学習支援 就労支援	キャリア教育 職業体験 SST 自己理解
高等教育機関期	専門学校、短大、大学、大学院 学生相談室 ハローワーク 発達障害者支援センター 他	学習支援 生活支援 就労支援	自己理解 障害の理解 (本人・家族) SST 制度活用の把握
就労期	ハローワーク 若者サポートステーション 就業・生活支援センター 障害者職業センター 発達障害者支援センター 他	就労支援 アセスメント 準備訓練 ジョブコーチ 就労支援 生活支援	障害の理解 (本人・家族) 就業と生活 制度活用の把握 職種の拡大 支援の継続

連携における保護者（母親）への聴き取り調査（学習障害のAさん 26歳）

1. ライフステージにおける連携機関の状況

	乳幼児期	小学校期	中学校期	高等学校期	卒業後
教育機関他	幼稚園	小学校 家庭教師 山村留学	山村留学 中学校	専修学校・通 信制高校	就職
連携先	・病院 ・保健所 ・市・教育センター	・病院 ・市・教育センター ・ことばときこえの教室 ・教育研究所 ・大学の土曜教室	・大学	・大学	・ハローワーク ・障害者職業センター 障害者職業総合センター ・生活支援センター

2. 生育歴（*本文中の下線は教育機関および連携先を示す。）

(1) 乳幼児期

Aさんは正常分娩であったが、1歳頃から発育の状況がきょうだいと違うので母親は心配していた。3歳児健診で自分の名前が言えない、信号機など色の名前が覚えられないなどを母親が訴え、病院で検査を受けた。8ヶ月の発育の遅れがわかり、集団の中に入れることを勧められた。幼稚園の3歳児クラスに入園したが、父親が転勤となり、転園した。幼稚園時代は、集団の輪の中に入れず、毎日登園拒否をし、月末や運動会など行事で発熱しながらも通園した。Aさんは車が好きで、クッションをハンドル、ものさしをギヤーに見立てたり、足こぎの車をバックで上手に車庫入れしたり、紐やゴムを2階からたらしてひっぱったりすることが好きだった。この頃、B医大小児科で診てもらったが、様子をみましようと言われた。

(2) 学童期

就学時健診で言葉の遅れ、構音障害、弱視、遠視を指摘され、眼鏡をかけることになった。小学校1年から「ことばときこえの教室」に通級し、2年生の時、九九を残り勉強で身につけることができた。小学校は嫌がらずに登校したが、後に本人に聞くと「学校は学ぶ所（行かなければならない所）」、「幼稚園は遊ぶ所（行かなくてもよい所）」と捉えていたことがわかった。家庭で母親と一緒に部屋を片付けたら、維持できていたので教えればできると思った。小学校では、忘れ物が多かった。歩けなくなるような感じで具合が悪くなることがよくあった。偏食は少ないが少食だった。3年生の頃、家庭教師をつけ、家庭、学校で手厚く対応しても改善がみられなかった。多動で落ち着きがなく、「ブーブー」と車の運転の真似が始まる。本人に